

夏目漱石「趣味の遺伝」論

——「余」が流した「涙」——

黄 倩 雯

序

夏目漱石による短篇小説「趣味の遺伝」は一九〇六（明治三九）年一月に「帝国文学」に掲載され、同年五月に大倉書店・服部書店より刊行された『漾虚集』に収められた。

漱石は高浜虚子宛書簡に「是は六十四枚ばかり。実はもつとか、んといけないが時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかつた変物が出来ました^①」と書いており、作品が発表された直後の一九〇六（明治三九）年一月一六日付の皆川正禧宛書簡には「結末の一气呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。実は時間がたりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとか、んと、前の詳細な叙述な比例を失する様に思ひます^②」と作品の均整を失するという意味のことを語っている。森田草平宛書簡にも「あれは頗る比例といふ点から云つては丸駄目の作である^③」と、作品の叙述の比例という点に問題があると述べている。

「趣味の遺伝」が掲載された翌月には、いくつかの評論があり、そのあと様々な角度から論じられてきた。漱石自身の言説を切り口にする先行研究では、小宮豊隆が「漱石自身言つてゐる通り、首尾の比例のとれない、芸術的には失敗の作品となつてしまつた^④」、大岡昇平も「漱石があつた『五六十枚』書けるとした内容には、郵便局であつた時の詳細は欠かせないはずだ。浩さんの日記では、ここはわざと消されているのですから、

もう一人の当事者である謎の女から語られなければ、一篇小説としても不備でしょう^⑤」、また、斉藤恵子も「戦争の主題と愛の主題は、漱石の中で、分裂していたのではなく、意図としては、緊密に結びつき、愛の物語も、戦争の場面に匹敵する規模で、漱石の頭には用意されていた。しかし書き出してみると、時間も足りなくなり、結局、尻切れとんぼの感を残して、『趣味の遺伝』は終つてしまつた。前後の比例を失したまま終つたのは、単に時間の不足というだけでなく、漱石のうちに「戦争という状況について、書きたい衝動がそれだけ強かつた」というのが真実だったのでないだろうか^⑥」と、それぞれの論が「趣味の遺伝」を失敗作であると評している。

一方で、山崎甲一は「丸駄目」とくり返し問題にする点は「叙述の比例」ということに過ぎない」と指摘し、「手紙で言う『省略』も作品で言う『端折』りも、この小説の實質的な「主人公」である「余」の造型と密接に関わつて出ている問題なのである^⑦」として、作者自身が「頭のかつた変物」「比例を失する」と認めてはいるものの、作品は「省略の許せる限度内に於いて『省略しました』ということ」であると論じている。

漱石が書簡の中で、執筆時間の不足と小説後半の描写の省略、そしてそれに伴う小説前後の不均衡を伝えている。しかし、作者は作品の叙述に関する問題点を挙げつつもその展開や主題において難点を示してはいない。それは、前後の描写における均整を失した本作をそれ以外の点で

は一定の完成をみたものと考えていたからではなかったのだろうか。本稿ではそのような視点から作品の考察を行いたい。そのために、語り手である「余」が自ら流したと語る「涙」に着眼する。物語前半において彼が將軍と軍曹を見て流した「涙」と後半に現れる浩一の母とお嬢さんを見て流した「涙」を分析し、それぞれにおいて「余」が受けた感動への考察を通じて作品に通底する主題を明らかにしたい。

一

「趣味の遺伝」の冒頭で、語り手の「余」は戦場の「空想に耽りながらいつしか新橋へ来」る。新橋停車場では凱旋を歓迎する人々を見て「犬に食ひ残された者の家族」と考える。「余」が冒頭の「空想」で思い描いているのは、日露戦争の印象である。

陽気の所為で神も氣違になる。「人を屠りて餓えたる犬を救へ」と雲の裡より叫ぶ声が、逆しまに日本海を撼かして満洲の果迄響き渡つた時、日人と露人ははつと応へて百里に余る一大屠場を朔北の野に開いた。すると渺々たる平原の尽くる下より、眼にあまる獐狗の群が、腥き風を横に截り縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出した様に飛んで来た。狂へる神が小躍りして「血を啜れ」と云ふを合図に、べら／＼と吐く焰の舌は暗き大地を照らして咽喉を越す血潮の湧き返る音が聞えた。今度は黒雲の端を踏み鳴らして「肉を食へ」と神が号ぶと「肉を食へ！肉を食へ！」と犬共も一度に咆え立てる。やがてめり／＼と腕を食ひ切る、深い口をあけて耳の根迄胴にかぶり付く、一つの脛を啣へて左右から引き合ふ。漸くの事肉は大半平げたと思ふと、又冪々たる雲を貫ぬいて恐しい神の声が出た。

「肉の後には骨をしゃぶれ」と云ふ。すはこそ骨だ。犬の齒は肉よりも骨を嚙むに適して居る。狂ふ神の作つた犬には狂つた道具が具はつて居る。今日の振舞を予期して工夫して呉れた齒ぢや。鳴らせ鳴らせと牙を鳴らして骨にかゝる。ある者は摧いて髓を吸ひ、ある者は碎いて地に塗る。齒の立たぬ者は横にこいて牙を磨ぐ。……

「余」は「書齋以外に如何なる出来事が起るか知らんでも済む天下の逸民である」と公言している。そのように世間と断絶している中で「平生戦争の事は新聞で読まんでもない、又其状況は詩的に想像せんでもない」と述べており、冒頭の日露戦争に対する印象もそのようにして思い描かれたものである。そして、冒頭での「空想」とは別に、作品の中で「余」は「高等学校時代」からの親友であった浩一が戦死する場面も想像によつて語っている。その場面に関して、「塹壕に飛び込んだ者は向へ渡す為に飛び込んだのではない。死ぬ為めに飛び込んだのである」という一文がある。それは、冒頭の「陽気の所為で神も氣違になる。「人を屠りて餓えたる犬を救へ」と雲の裡より叫ぶ声が、逆しまに日本海を撼かして満洲の果迄響き渡つた時、日人と露人ははつと応へて百里に余る一大屠場を朔北の野に開いた」との描写と照応している。また、浩一が戦死する場面には「穹窿より靄を定めて打ち出す機関砲は、杖を引いて竹垣の側面を走らす時の音がして瞬く間に彼等を射殺した」ともあるが、それも先の「空想」の「渺々たる平原の尽くる下より、眼にあまる獐狗の群が、腥き風を横に截り縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出した様に飛んで来た」という一文と呼応している。

冒頭の「空想」と後の浩一の戦死の場面において、「詩的」である前者に対して後者はより現実的で生々しい。ただし、両者に共通しているのは、戦場で人々が生き残るために闘っているのではなく、ただ死に向かっ

ているという点である。その死を前提としているということこそが「余」の戦場に対する理解であろう。

ステッセルは降つた。講和は成立した。將軍は凱旋した。兵隊も歓迎された。然し浩さんはまだ坑から上つて来ない。凶らず新橋へ行つて色の黒い將軍を見、色の黒い軍曹を見、脊の低い軍曹の御母さんを見て涙迄流して愉快に感じた。

戦場は一般の兵士にとって死地である。「余」はそこから帰還した「黒い將軍を見、色の黒い軍曹を見」、また「脊の低い軍曹の御母さんを見て」、「涙迄流して愉快に感じ」ている。彼が凱旋する將軍と軍曹を見て、「愉快に感じ」たものとは何であつたのだろうか。

咄嗟は此よく、せきを煎じ詰めて、煮詰めて缶詰めにした声である。死ぬか、生きるか娑婆か地獄かと云ふ際どい針線の上に立つて身震ひをするとき自然と横膈膜の底から湧き上がる至誠の声である。助けて呉れと云ふうちに誠はあらう、殺すぞと叫ぶうちにも誠はない事もあるまい。然し意味の通ずる丈其丈誠の度は少ない。意味の通ずる言葉を使ふ丈の余裕分別のあるうちは一心不乱の至境に達したとは申されぬ。咄嗟にはこんな人間的な分子は交つて居らん。ワーと云ふのである。此ワーには厭味もなければ思慮もない。理もなければ非もない。詐りもなければ懸引もない。徹頭徹尾ワーである。結晶した精神が一度に破裂して上下四囲の空気を震盪させてワーと鳴る。万歳の助けて呉れの殺すぞのとそんなけちな意味を有しては居らぬ。ワー其物が直ちに精神である。霊である。人間である。誠である。而して人界崇高の感は耳を傾けて此誠を聴き得たる時に始めて享受し得ると思ふ。耳

を傾けて数十人、数百人、数千数万人の誠を、一度に聴き得たる時に此崇高の感は始めて無上絶大の玄境に入る。——余が將軍を見て流した涼しい涙は此玄境の反応だろう。

戦争が続いても「戦争らしい感じがしない」と語る「気楽な人間」である「余」は、凱旋した將軍を見て、「満州の大野を蔽ふ大戦争の光景」を「脳裏に描出」する。凱旋した兵士たちを包む「万歳」の声は「満州の野に起つた咄嗟の反響」として「余」の胸を打っている。そして、「万歳の意義は字の如く読んで万歳に過ぎんが咄嗟となると大分趣が違ふ。咄嗟はワーと云ふだけで万歳の様に意味も何もない。然し其意味のない所に大変な深い情が籠つて」いるという。そして「余」は「咄嗟」とは「死ぬか、生きるか娑婆か地獄かと云ふ際どい針線の上に立つて身震ひをするとき自然と横膈膜の底から湧き上がる至誠の声」だと考えている。彼によると人間は「一日二十四時間のうち二十三時間五十五分迄は皆意味のある言葉を使つ」ていて、戦場でも「助けて呉れ」、「殺すぞ」といった意味を通ずる為の言葉を用いている。「然し意味の通ずる丈其丈誠の度は少な」い。「件のないのに意味の分らぬ音を出すのは尋常ではない。出しても用の足りぬ声を使ふのは経済主義から云ふても功利主義から云つても割に合わぬ」に決まつており、それ故に戦場で使う「助けて呉れ」とか、「殺すぞ」などの意味がある言葉は「経済主義」的、「功利主義」的とされる。

そうした言葉に対して、「余」は「咄嗟」が、「ワー」だけで「厭味もなければ思慮もない。理もなければ非もない。詐りもなければ懸引もない」ものであり、意味のない叫びこそが「精神である。霊である。人間である。誠である」と主張している。その意味のない叫びこそがむしろ人間心の奥で隠した真摯な感情を反映するのである。將軍が「耳を傾け

て数十人、数百人、数千数万人の誠を一度に聴き得たる」時、「この崇高の感は始めて無上絶大の玄境に入る。「余」は戦争を代表する將軍の姿を通して、人間偽りのない真心を反映する玄境の風景を脳裏に描写し得たのである。また、「余」によると、兵士たちは戦場において最前線で敵と対峙し、国のために戦うとき、「日本の精神を代表」しているのだという。そのうえ、彼等は「日本の精神を代表するのみならず、広く人類一般の精神を代表」している人物であるとされている。彼が言う「広く人類一般の精神」とは、「経済主義」的、「功利主義」的なものではなくて、人間の「誠」の感情そのものである。

群衆から見て、凱旋してきた戦士たちは敵と戦い勝利した英雄であり、まさに「日本の精神を代表」するものと映るのである。そして、彼等の勝利を見て、歓迎にやって来た人々は意義のある「万歳」という言葉を使う。しかし、軍曹の母のように肉親を迎えにきた人々にとって事情は異なっている。肉親を求める軍曹の母は肉親を見て「万歳などには毫も耳を借す景色はない」のである。その様子を捉えた「余」の万歳が止まったのは、彼が彼女の中にも人間の真情を見出し、周囲の人々との格差に思い至ったからに他ならない。「余」の心はもはや政治的経済的立場から問題を観ようとする「群衆」ではなく、軍曹の母のように肉親を迎えにきた人々に寄り添っている。「余」は「図らず新橋へ行」ったことで人間の「誠」を代表している將軍と軍曹の姿を見て感動した。そして、肉親を求めてやって来た「脊の低い軍曹の御母さん」を通じて人情の「誠」を確かめていて、「愉快」に感じ涙まで流していた。

二

余は色の黒い將軍を見た。婆さんがぶら下がる軍曹を見た。ワー

と云ふ歓迎の声を聞いた。さうして涙を流した。浩さんは塹壕へ飛び込んだり上つて来ない。誰も浩さんを迎に出たものはない。天の下に浩さんの事を思つて居るものは此御母さんと此御嬢さん許りであらう。余は此兩人の睦まじき様を目撃する度に、將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す。博士は何も知らぬらしい。

作品の終局で「余」は、浩一の母と御嬢さんの姿を目にした時に「広く人類一般の精神」を代表する將軍や軍曹を見たよりも「清き涼しき涙を流」したと語っている。それではこの二人を見て、「余」が何を感じたのであろうか。まずはそれぞれの人物に深く関係している浩一の人物像から分析して行きたい。

浩一は「余」が「高等学校時代」から親しい付き合いのある一人であった。「余」の聞くところによると「浩一さんの家は紀州の藩士」であったが、「江戸詰で代々こちらで暮らした」という。また、家令からは浩一の祖父が「留守居」を務め、父親は「江戸詰」であったことが伝えられている。

江戸期には「大名諸家には通常二種類の留守居なる役職」^⑩があった。一つは、「大名不在の際に居城や江戸屋敷の守衛・統括を主務とする軍職」であり、家老・重臣といった上席者が任ぜられるのを通例^⑪としていた。もう一つは「幕府や他の大名諸家との交渉・連絡を専門職務とする非軍事的な外交官」^⑫である。また、近世中期ごろになると、次第に彼らは「第二種の留守居役の役職名を正式にも「留守居」と改めるようになっていた」^⑬ということである。浩一の祖父は第二種の「幕府や他の大名諸家との交渉・連絡を専門職務とする非軍事的な外交官」^⑭に所属している。それは「大名家(藩)において中堅クラスを構成していた物頭・平士といった階層の者から選任されるのが通例」^⑮であった。

江戸期における大名家（藩）内部の身分類別は、それぞれの大名家によってさまざまあり、類別の区分もそれらの名称も一定ではないけれども、基本的な類別と序列は次のような形をとっている。「藩主（大名）——一門・家老——組頭（番頭・中老）——物頭——平士（番士・組士）——以上、御目見以上。以下、御目見以下」——徒士——足軽——中間・小者」である。また、大名家（藩）の家臣は、いずれの大名家の場合にあっても、「平士以上の上級武士と、それ以下の下級武士に二分^⑰」される。故に浩一の祖父と父親は「上級武士」に属している。

「余」の聞くとところによると「浩一さんの家は紀州の藩士」である。紀州徳川家は、江戸時代に紀伊国・伊勢国を治めた徳川氏の一支系で、徳川御三家^⑱の一つである。浩一の祖父と父親はその藩において「上級武士」に属していたので、浩一も幼少期から武士精神に深く影響された人物であると考えられる。

山本常朝は『葉隠』の中で「武道」「武士道」を定義して言う。「武士道と云ふことは、即ち死ぬこと、見付けたり。凡そ二ツ一ツの場合に、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわりて進むなり。若し凶にあたらぬとき、犬死などと云ふは、上方風の打上りたる武道なるべし。二ツ一ツの場合に、凶にあたることのわかることは、到底出来るべし。二ツ一ツの場合に、凶にあたることのわかることは、到底出来るべし」という言葉があり、また「武篇は、敵を討ち取りたるよりは、主（主君）の為に死にたるが手柄なり」という山本常朝の言葉がある。浩一の日記に、「死は早晚余を襲い来らん。余は日夜に両軍の砲撃を聞き、今かくと順番の至るを待つ」「余の運命も愈明日に逼つた」と書いている。浩一は、戦場で生死の選択を対面するとき、死に恐れず「旗を持って思い切りよく塹壕の中へ飛び込ん」だ。戦地で記された日記には、「軍人が軍さで死ぬのは当然の事である。死ぬのは名誉である。ある点から云へば生きて本国に帰るのは死ぬべき所を死に損なつた

様なものだ」という彼の覚悟が遺されており、自らの死を向かう浩一の武士道精神が読み取れる。

親友である「余」が語る浩一は「大きな男」、「立派な男」、「偉大な男」で、容姿が立派だけでなく全幅の信頼を寄せる人物である。軍隊においては、浩一が志願兵から歩兵中尉となり、旗手という役を担当していた。軍旗は、「近衛軍以外の軍人たちに常時天皇の馬前に任務を尽くす意識を特たせる為に親受される。故に部隊にとってこれは神聖視すべきものであり、「青年士官の中・少尉の旗手はまさに将校の華であり事実優秀な青年士官が旗手になった」ということで、浩一が軍隊の中でも、信頼される優秀な兵士であったことが確かめられる。幼少期から武士精神に深く影響され、優秀な浩一は、何故に志願兵となったのであろうか。

一八八九（明治三二）年の「徴兵令^⑳」によると、当時一年志願兵制度が設けられていた。志願兵の服務義務は現役一年、予備役一年、後備役五年の合計七年である。一般徴兵の陸軍兵の服務義務は現役三年、予備役四年、後備役五年の合計一二年であった。故に志願兵となった場合には五年間期間を短縮できる。志願兵として入隊する場合、「満十七歳以上満二十六歳以下ニシテ官立学校（帝国大学選科及小学校ヲ除ク）府県立師範学校中学校若クハ文部大臣ニ於テ中学校ノ学科程度ト同等以上ト認メタル学校若クハ文部大臣ノ認可ヲ経タル学則ニ依リ法律学政治学理財学ヲ教授スル私立学校ノ卒業証書ヲ所持シ若クハ陸軍試験委員ノ試験ニ及第シ服役中食料被服服装具等ノ費用ヲ自辨スル者」という条件が必要であった。高等学校を卒業し、「上級武士」であった家の出である浩一は、学力の面でも経済的な面でも条件は満たしていたと考えられる。しかし、家令の話によると浩一は、五、六歳の頃に父親をなくしている。いくら経済力がよくても、父親を無くした家庭にとって家計は以前よりは悪くなっているであろう。

そのような家庭環境の中で、浩一は多少無理しても、志願兵となった。武士精神に影響され、死を恐れず浩一は、何故無理しても服務期間が五年短縮できる志願兵の道を選んだのだろうか。それは彼の心の中で、早く服務義務を終わらせ、一人で暮らす母親の元へ帰り、母親への愛情を強く持っているからであろう。浩一は最後の日記に「御母さんは、寒いだろう」という一文を書き残している。彼の個人として「誠」の「情」はここで表れている。浩一は一人で暮らす母親への愛情を強く持っているが、一般の兵士にとって、生きて帰ることが至難である残酷な戦場において旗手として死に、母の元への生還は叶わなかった。しかしながら、浩一自身はその個人としての真情を成就できなかったのであるが、作品の終局においては彼の代わりに、小野田工学博士の妹が「丸で御嫁さんの様」になって浩一の母と話している。語り手である「余」は、自らの「趣味の遺伝」説を通じてそこに浩一の戦死によって成就できなかった人間愛情の要求の達成を見出すのである。

「余」は自分なりに打ち立てた「趣味の遺伝」論によって、「二十世紀の人間」の「散文的」で「不思議な現象に逢はぬ前なら兎に角、逢ふた後にも、そんな事があるものかと冷淡に看過」する人々を説得し、この世には「不思議な現象」がありえるのだと納得しようとしている。読者もその「不思議な現象」を納得したうえで、浩一と「郵便局の女」の愛の成就を信じることを期待されている。小野田工学博士の妹が「丸で御嫁さんの様になった」という状態から、科学的な説明により浩一の成就できなかった人間の真情や母親を思う「愛情」を導き出してそれらを現実の世界で成就させた。そして「余」は、「趣味の遺伝」説によって科学的に達成された人の「誠」の「情」に感動し、兩人の仲睦まじい様を目撃するたびに、「將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流」す。それは、「余」の「散文的」な「趣味の遺伝」説から成就さ

れた「情」が生死の境を越え、將軍を見たときに感じた感動よりも深く彼の心を打ったからである。

三

「趣味の遺伝」の語りは、「余」の「將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも」流した「清き涼しき涙」によって閉じられている。その「涙」を通じて、漱石が読者に伝えたかったものとは、何であったのだろうか。漱石が「余」の「趣味の遺伝」説の合理性を読者に証明したかとなると、そのための証拠を提示しなければならなかったはずである。実際に「余」の「趣味の遺伝」説の実証の過程は不備だけであることが作品から読み取れる。

「余」は自分の「遺伝理論」を確信し、「こんな問題は当人の支配権以外に立つ問題だから、よし当人を尋ねあてて事実を明らかにしたところ不思議は解けるものでない。当人から聞き得る事実その物が不思議である以上は余の疑惑は落ちつきようがない」と、始めから三人の女が同一人物であるという前提に立っている。しかし、作品内で「寂光院の女」がはたして浩一の日記にあった「郵便局の女」と同一人物なのかどうかは明らかではない。神田祥子は指摘されたとおり「〈余〉の〈趣味の遺伝〉理論の不確かさは、最終的に女A²⁴ 女Bであるか、もしくは女B 女Cであるかが決然していないところにある。また結局、浩さんが女Bにたいしてどんな感情を抱いていたかは依然明らかになっていない²⁵」のである。

しかし、「余」は「趣味の遺伝」の理論があたかも成立しているかのようになり、「趣味の遺伝と云ふ理論」を「証拠立てる」ような有利な情報に出会うたびに、「さう来なくつては思ふ」、「占めた〜これ丈聞けば充分だ」

というように、相の手を差し挟んでいる。一柳広孝も「彼の「事実」収集における視点がきわめて恣意的であり、「彼のいう理論にも論理的裏付けが明記されていないことは、すでに見てきたとおりである。彼の理論は、「余」自身から見ても「ある程度迄」の説明にすぎない」としている。

漱石自身も「趣味の遺伝」における理論は科学上にまだ不十分などころがあると知っているはずである。しかし、それを十分なものとして書き上げなかった。その理由は、書簡の中で書かれているように、単に時間が無かったというだけでは済まないと思う。「趣味の遺伝」の初出は一九〇六（明治三九）年一月であり、初収録の一九〇六（明治三九）年五月まで、不十分な点を書き足す時間もあつたと考えられるが、何故に漱石はそれをしなかったのであろうか。それは、漱石が科学的に物事を説明する「学者」である「余」と離れ、文学者への志向を持っているからであろう。「六十四枚ばかり」の「趣味の遺伝」の中で、その主意を尽くしたと考えていたからではなかったのだろうか。

漱石は『文学論』第三編文学的内容の特質第二章文芸上の真と科学上の真の中で「文学者の重すべきは文芸上の真にして科学上の真にあらず」と主張している。「文芸上の真」とは「描写せられたる事物の感が真ならざるを得ざるが如く直接に喚起さるゝ場合を云ふに過ぎず。」と漱石が述べた。文学者として、あるいは「文士」としての漱石が「趣味の遺伝」においても重んじたのは「科学上の真」の解明ではなく、「文芸上の真」であつたのだから。そしてそれを描くために必要だと彼が考えているものとして、「誇大法」、「省略、選択法」、「組み合わせ」が挙げられている。文学者である漱石は「物の一面一部を撰み」「省略、選択法」を利用し、「余」の不備だらけの「趣味の遺伝」を成立させたのである。

漱石は、「趣味の遺伝」の中で、「西片町に住む学者」である「余」を

語り手としている。専門が何であるかについては、作品中に具体的に述べられていない。また、「家令」は「余」が「大学出」であることを前提にして話を進めている。これらのことから、「余」は大学出での学者であることは確かだろう。明治期においては「学校出」が、そのことだけで社会的に優遇される意識体制が形成²⁸され、「学問と教育は別」であり、「帝国大学ハ学問ノ場所ニシテ中学校、小学校ハ教育ノ場所」にほかならなかった。「学問」の目的は、「深ク事物ノ真理ヲ改究²⁹」することであつた。当時の「教育目標の二重構造がしるされた教育体系によつて、「学者ナレバ學術専攻者ノ如キ社会多数ノ思想ヲ左右スルニ足ルヘキモノ」である³⁰」というので、「余」も「学者」ということだけで、社会的に信用ある存在であつたといえる。

作品の中で述べられたように、人々の「観察点と云うものは従来の情性で解決」せられる。それ故、「真理の改究」の場としての大学を卒業した「学者」である「余」は、社会のほかの人々の「観察点」からみたら、信頼すべき存在である。当然、「余」の口から語られている「趣味の遺伝」説も、人々にとつて信用するに足る学説として受け取られることになる。漱石が「余」を形象する際に「学者」という社会的地位を与えたのは、世間の人々に、「余」の不備だらけの「趣味の遺伝」説を納得させるためでもあつたのだから。そのうえで漱石が文学における主眼とする「文芸上の真」の感動が読者に伝えられるのである。

漱石は『文学論』の中で「詩人画家等の想像的創作物を云ふ」「即ち彼等は現実の世より蒐め得たる材料を綜合して此世に存在せざるものを描出する手際を有したるなり」と主張しており、これらは「此世に於て求めて得べきものにあらざれば科学的立脚地より檢して不合理なるは無論」であるが、「由来文芸の要素は感じを以て最とするものなるが故に、此感じを讀者に伝へんとして伝へ得たるとき吾人はこれに文芸上の真を

附与するを躊躇せず^①という。「余」の「趣味の遺伝」理論も、「科学的立脚地より檢して不合理」であり、漱石自身もその理論が科学上に不十分なところがあると知っているが、「文芸の要素」において「最」たるべき「感じを読者に伝へん」がため、漱石は科学上にまだ不十分な「趣味の遺伝」説を提出した。それを通じて、人間の真情が読者に伝えられた。

結

以上の考察からわかるように、「趣味の遺伝」の中で、漱石は「余」の將軍と軍曹を見て流した涙を通じて、人間の「誠」な「情」を読者に伝えようとした。また作品中、「余」が浩一の母と御嬢さんの仲を目撃するたびに、將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも「清き涼しき」涙を流した。漱石は作品を通じてその感動を読者に伝えようとした。読者は、漱石が創作した「趣味の遺伝」説を十分に納得し得ないが、作品の中で語り手「余」の涙を通じて、「経済主義」的、「功利主義」的でもない人間の真情を感じ得た。

漱石は、「文芸上の真と科学上の真と其間に微妙の關係あるは勿論なれど、文芸の作家は文芸上の真を其第一義とすべく、場合によりては此文芸上の真に達し得むが為めに甘じて科学上の真を犠牲とするも不可なきにちかし。文芸上の真にして科学上の真に背くもの一にして足らず」と述べている。作品中に「読者の心に合点出来ればこの一篇の主意は済んだ」と話を閉じてしまう。漱石が読者の心に訴えたかったのは、「趣味の遺伝」説の「科学上の真」の解明ではなく、人間の「誠」の「情」という「文芸上の真」であった。そういう点から、「文士」である漱石は「学者」である「余」と微妙で決定的な距離を保っていることも分かる。漱石は人間の真情を無視し、何でも「散文的」に解釈づける「二十世紀の

文明」に危機感を持っている。そして、漱石の「学者」である「余」と離れ、「文士」への志向は、文学作品を通じて読者に人間の真情を訴えることである。「文芸上の真」を読者に伝えたいため、文芸家としての漱石は、「余」の理論を用いてそれを行った。十分な執筆時間がなかったという本作は、結果的に「前の詳細な叙述な比例を失」してしまっている。しかしながら、叙述における不均衡を冒し「頭のかつた変物」となりながら、それでも後に書き足されることはなかったのである。それは、作中の「余」の語りの中に漱石が創作において重要と考えていた「文芸上の真」が現れているからなのである。

注

- ① 一九〇五年二月一日付高浜虚子宛書簡
- ② 一九〇六年一月一日付皆川正禧宛書簡
- ③ 一九〇六年二月一日付森田草平宛書簡
- ④ 「新潮」(第四卷第二号 一九〇六・二)

夏目漱石の『趣味の遺伝』は異種様の文なり、妙文なり、マジメなる滑稽文なり。

「中央公論」(第二一年第二号 一九〇六年二月一日発行)

「趣味の遺伝」は題文見ると論文のやうであるが、論文ではない、小説である。清き想、美はしき描写、篇中到處に満ち溢れて居るが結末余り簡略に過ぎて全体の釣合が取れぬ様な心地するのは遺憾だ。然し兎に角新春の文壇に読みごたへのあるのは此人の作であつた。

「新聲」(第拾四編第二号 一九〇六・二)

漱石が色々な雑誌に書く中でも、一番良いものが出るのが「帝国文学」だ、嘗て「倫敦塔」があつたが、新春の「趣味の遺伝」は、倫敦塔に相次ぐべき傑作だ、之れから見れば、猫も、幻の盾も雑露行も悉く駄目、矢張り漱石は学士であつた。処で緑雨式に新年の「帝文」を分類すると、俳人漱石坊同宿三博士、五文学士と云ふことになる。

「芸苑」(卷第二 左久良書房 一九〇六・二)

若し新春の作物中で最深い興味を感じて読むものはと問はれたなら、自分は直にこの作を挙げるに躊躇しない、と之れだけ書くことと自分は何も外に云ふことが無い。

「文庫」(第三拾一卷第二号 内外出版協会 一九〇六・二)

エモアリストとして僕は夏目漱石を推す、どうしても漱石はゑらい。吾輩は猫であるも面白かつたが、『趣味の遺伝』なども実に興味がある。漱石でなければ書けない所がある、新橋のステーションで飛び上るなどは実に滑稽だ。同じくエモアリストとして佐藤紅緑を推すものがあるが、成程「カチ／＼山」などは面白けれど、とても漱石には及ばぬ。

- ⑤ 浩一さんと小野田のお嬢さんの不可思議な恋愛の実現を主題とし、作者の内的意識を掘り起こした越智治雄氏『漾虚集』一面(『漱石私論』角川書店 一九七一)。この作品を厭戦文学に位置付けられている駒尺喜美「漱石における厭戦文学——趣味の遺伝」——(『日本文学』二一、一九七二・六)。「趣味の遺伝」という霊の感応を主題とした作品とする菊地弘「趣味の遺伝」論(内田道雄・久保芳太郎編『作品論夏目漱石』双文社出版 一九七六・九)。揮真文学と見る鈴木醇爾「趣味の遺伝」について——漱石における揮真文学への方法的模索(『国文学』ノート)第十六号、成城短期大学国文学研究室 一九七九・三)。「趣味の遺伝」の中で重要なキーワードとなっている「諷語」に着目した竹盛天雄『漱石文学の端緒』(筑摩書房 一九九一・六)、また軍事技術の革新によってもたらされた新たな知覚という観点から論じている。佐藤泉「趣味の遺伝」——旅順上空、三次元の眼について(『国文学』——解釈と教材の研究』第三九巻第二号臨時号、一九九四・一)など。

- ⑥ 小宮豊隆『漱石の芸術』(岩波書店 一九四二・二)
- ⑦ 大岡昇平「漱石と国家意識」(『世界』一九七三・一・二)
- ⑧ 齊藤恵子「『趣味の遺伝』の世界」(『比較文学研究』第二四号 一九七三・九)
- ⑨ 山崎甲一「写すわれと写さるる彼——『趣味の遺伝』のこと」(『鶴見大文学紀要』第二三三号 一九八六・三)
- ⑩ 笠谷和比古『歴史文化ライブラリ 江戸御留守居役 近世の外交官』(吉川弘文館 二〇〇〇・四)

- ⑪ 注⑩と同じ
- ⑫ 注⑩と同じ
- ⑬ 注⑩と同じ
- ⑭ 注⑩と同じ
- ⑮ 注⑩と同じ
- ⑯ 注⑩と同じ
- ⑰ 注⑩と同じ
- ⑱ 御三家は徳川將軍家の一族である尾州、紀州、水戸の三家をいう。尾張は家康の第九子義直、紀伊は第一〇子頼宣、水戸は第一子頼房にはじまり、代々徳川氏を称した。親藩のなかで別格の家柄として最高の待遇をうけた。おのおの独立した藩をかまえて、尾張家は名古屋城主、尾張一國・美濃一部(六〇万石余)、紀伊家は和歌山城主、紀伊一國・伊勢松坂(五五万石余)、水戸家は水戸城主、常陸一國(三五万石)を領有した。紀州藩は紀伊藩、和歌山藩ともいう。紀伊國(和歌山県)一國と伊勢國(三重県)の一部を領有した藩。初め外様、のち親藩。一六〇〇年(慶長五)関ヶ原の戦いの結果、浅野幸長が甲斐國(山梨県)から入国し、翌年検地を実施し、高野山領を除いて三七万六五二石余を打ち出した。以後、一六九七年(元禄十)、九八年に地詰が行われたが、全藩的な検地は実施されなかった。この慶長検地によって紀伊藩が確立したが、大坂冬の陣、夏の陣で軍事力が手薄になると北山一揆などが起きて支配は動揺した。一六一九年(元和五)に浅野氏が安芸國(広島県)に転封となると、徳川家康の第十子頼宣が駿河(静岡県)から入り、伊勢・大和(奈良県)の各一部をあわせて五五万五〇〇〇石を領有し、御三家の一つとなった。(参照『日本国語大辞典』第二版 第五巻 小学館 二〇〇三・五)
- ⑲ 「あれかこれか、生か死かの選択を迫られたとき」(『葉隠全集』)編者 中村郁一 五月書房一九七八・二二)
- ⑳ 編者 中村郁一『葉隠全集』(五月書房 一九七八・二二)
- ㉑ 福地重孝『軍国日本の形成』(春秋社 一九五九・十二)
- ㉒ 『法令全書』第二十二巻一 明治二二年(出典内閣官報局 原書房 一九七八・三)
- 法律／朕徴兵令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム／御名 御璽／

明治二十二年一月二十一日／内閣総理大臣伯爵黒田清隆／陸軍大臣伯爵
 大山 巖／海軍大臣伯爵西郷従道／法律第一号(官報 一月二十二日)／
 徴兵令／第一章 総則／第一条／日本帝国臣民ニシテ満十七歳ヨリ満
 四十歳迄ノ男子ハ総テ兵役ニ服スルノ義務アルモノトス／第二条／兵役
 ハ分テ常備兵役後備兵役及国民兵役トス／第三条／常備兵役ハ分テ現役
 及豫備役トス／現役ハ陸軍ハ三箇年海軍ハ四箇年ニシテ満二十歳ニ至リ
 タル者之ニ服シ豫備役ハ陸軍ハ四箇年海軍ハ三箇年ニシテ現役ヲ終リタ
 ル者之ニ服ス／第四条／後備兵役ハ五箇年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者
 之ニ服ス／第五条／国民兵役ハ満十七歳ヨリ満四十歳迄ノ者ニシテ常備
 兵役及後備兵役ニ在ラサル者之ニ服ス／(中略)／第十一条／満十七歳以
 上満二十六歳以下ニシテ官立学校(帝国大学選科及小学校ヲ除ク)府県立
 師範学校中学校若クハ文部大臣ニ於テ中学校ノ学科程度ト同等以上ト認
 メタル学校若クハ文部大臣ノ認可ヲ経タル学則ニ依リ法律学政治学理財
 学ヲ教授スル私立学校ノ卒業証書ヲ所持シ若クハ陸軍試験委員ノ試験ニ
 及第シ服役中食料被服装具等ノ費用ヲ自辨スル者ハ志願ニ由リ一箇年間
 陸軍現役ニ服スルコトヲ得但費用ノ全額ヲ自辨シ能ハサルノ証アル者ニ
 ハ其幾部ヲ官給スルコトアル可シ／前項ノ一年志願兵ハ特別ノ教育ヲ授
 ケ現役満期ノ後二箇年間予備役ニ五箇年間後備役ニ服セシム／満十七歳
 以上満二十六歳以下ニシテ官立府県立師範学校ノ卒業者ハ六箇月間陸軍
 現役ニ服スルコトヲ得其服役中ノ費用ハ当該学校ヨリ之ヲ辨償スルモノ
 トス／前項志願兵ニシテ現役ヲ終リタル者ハ七箇年間予備役ニ服シ三箇
 年間後備役ニ服シ(「」は改行を表す。筆者による。)

②③ 注②と同じ

②④ 神田祥子は「余」が寂光院へ浩一さんの墓参に出かけた女を女Aとして
 いる。また浩一さんが郵便局で出会ったある女を女Bにし、帯刀の娘の縁
 戚である小野田博士の妹を女Cにしている。

②⑤ 神田祥子「趣味は遺伝するか―夏目漱石「趣味の遺伝」論」(『日本近代
 文学』巻七六 二〇〇七・五)

〈余〉の〈趣味の遺伝〉理論の不確かさは、最終的に女A≡女Bである
 か、もしくは女B≡女Cであるかが決然していないところにある。また結
 局、浩さんが女Bにたいしてどんな感情を抱いていたかは依然明らかに

なっていない。そして何よりも決定的なのは、仮に女A≡女B≡女Cが成
 立し、浩さんとの間に恋愛感情があったとしても、真にそれが〈遺伝〉に
 より現象なのかは不明であるということである。むしろ、〈余〉はすでに
 結果の分かっていることに対して、それがあたかも何かの理論に従って展
 開されているかのように、〈趣味の遺伝〉理論を後付けしていると思
 えるのであり、〈余〉がしばしば軽薄な語り手であることが指摘される所
 でもある。(中略)〈余〉が事件の顛末をすべて知った上で、この物語を
 書いているという設定になっていることを考えれば、ここにはやはり〈余〉
 の意図的な語りの操作を読み取るべきではないだろうか。このあとを詳し
 く叙述するとすれば、〈余〉は当然女C≡女Bであることのもっと解り易
 い証拠や、なぜ一目見ただけの男女に恋愛が成立することかという理由、さ
 らにそれが〈遺伝〉によることの詳しい根拠を語らねばならない。そうす
 れば、理論の破綻はさらに明らかである。〈余〉は〈趣味の遺伝〉理論が
 あたかも成立しているかのように、読者を錯覚させられるぎりぎりのとこ
 ろで、筆を擱かねばならなかったのである。

②⑥ 一柳広孝「理科」と漱石―「趣味の遺伝」から」(『国文学解釈と教材』
 四二巻六号 一九九七・五)

②⑦ 夏目金之助『文学論』(第三編文学的内容の特質第二章文芸上の真と科
 学上の真)『漱石全集 第十四巻』(岩波書店 一九九五・八)

②⑧ 相賀徹夫『教育学全集3 近代教育史 3』(小学館 一九七五・十)

②⑨ 麻生 誠『教育学大全集3 近代化と教育』(第一法規出版
 一九八二・十二)

③⑩ 注②と同じ

③⑪ 注②と同じ

③⑫ 注②と同じ

付記

「趣味の遺伝」本文を含め、夏目漱石の著作の引用はすべて『漱石全集』
 (岩波書店一九九三年一月―二〇〇四年十月)に拠り、ルビは省略した。

(西華大学助教・本学大学院博士後期課程)